

## 「李陵」論 — 公德と私情との狭間 —

孫 樹林

「李陵」は、中島敦の近い翌年の昭和十八年七月号の『文学界』に発表された。中島敦の最高の作と思われる「李陵」は、従来よく論じられる作品の一つであるが、本格的な作品研究が行われるのは昭和三十年代からであり、主に福永武彦がその研究の端緒を開いたと思われる。福永武彦は「李陵」の主題について、運命に対する「脱出」の試み、また「天と人との相克」と論じる。その後、「運命の悪意」、「存在根拠の喪失」などの論が主なものである。

典拠比較論の早いものは国岡彬一の「漢書から見た『李陵』と平田貫一郎の「中島敦の『李陵』」であり、佐々木充の論考はより詳細だと思われる。同氏の論は、「李陵」の漢籍との典拠関係について考察し、主に『漢書』、『史記』、『文選』、『論語』から素材を取ったと指摘し、そのモチーフは、「人間の生の条件」、「生の実相」を捉えようとしたものと論じる。

先行研究では、主題論、構造論、典拠比較論をメインにして行われているが、その作品に投影している中国思想を本格的に考察する研究はまだないようである。本稿では、「李陵」に登場している司馬遷と李陵を軸に分析し、また、作品の底に潜んでいる中国思想を考察することによって、主人公の悲運の原因を探ってみたい。

「李陵」において、司馬遷は李陵のために直言をもって弁じたため宮刑を受けた。周知のように、これは史実そのままである。しかし、中島敦は、この史実をもとにしてどのような司馬遷の像を描こうとしたのか。

李陵の敗報を聞いた武帝は、思いのほか腹を立てなかつた。しかし、翌天漢三年の春になって、李陵は戦死したのではなく、捕えられて虜に降つたのだという確報を耳にしたとき、武帝ははじめて赫怒した。武帝は諸重臣を召して李陵の処置について計った。帝の顔色を窺いながら行動する群臣の殆どは武帝の意に迎合し、口を極めて李陵の売国的行為や変節漢を罵るのである。しかし、司馬遷は、李陵を「孝」「信」「誠」と褒め、「彼が死せずして虜に降つたといふのも、潜かに彼地にあつて何事か漢に報いんと期してのことではあるまいか。」と明言した。

この放言は、君主の意思に背いたものというより君主の尊厳に挑戦

することになるのである。君主に面しているこの状況下に、敢えてこれほど恣意に放言できたのは、君臣の道からすれば放恣としか見られない。したがって、この放言は、君主を激怒させたのも言うまでもなく、一堂の重臣をも驚かし、「余りにも不遜な態度だといふのが一堂の一致した意見」である。君主絶対という漢の時代の状況に即してみれば、厳守すべき君臣の道に背いた彼が宮刑を受けたのは案外でもなければ、冤罪ともいえない。

臣として如何に行動すべきかについては、中島敦は「弟子」（『中央公論』昭18・2）においてすでに触れている。「弟子」において、身をもつて義を取るべきだと考える子路にとつて、孔子の正諫に関する説はあまりにも曖昧である。しかし、孔子は諫死すべき時に行えば、それは仁であるが、そうでない時は区々たる一身を持って正そうとするのは無駄に生命を棄てることである、また君正しからず一國正しからずと知れば潔く身を引くべきだという。これは、「邦に道有る時も直きこと矢の如し。道無き時も又矢の如し。」という論理であり、孔子の中庸思想の実践論的なものである。これは、孔子がたんに個人の利害損失という立場からするのではなく、国家あるいは君子として守るべき大いなる倫理から説いたのであるが、そのことは子路に理解できない。しかし、この論理は、「己れの愚かさに殉じ」て生きるような子路、また、その延長線上にある司馬遷にとつても同然、明哲保身としか見えなく、仁や忠を反するものと思われるのである。中島敦は、「弟子」において子路の悲運が彼の性格というよりその文化圏内における規則にうまく適応できなかったため生じたものであろう問題をひそかに提起し、「李陵」において再提出しているのである。

重臣たちの態度に対し、司馬遷自身も自分の言論が必ずしも適切とは考えない。怨恨が長く君主に向かい得ないとすると、今度は問題の焦点を武帝の身の回りにいる奸臣、「奸人物」にあてた。しかし、これでも問題の解決とならない。最後に、司馬遷は、「強ひていへば、唯、『我在り』といふ事実だけが悪かつたのである。」と、自分自身に問題の原因を採すに至つた。無論、この「我あり」とは、彼の私的な強情と自恃である。「李陵」において、中島敦はこの司馬遷のことを次のように書いている。

後代の我々が史記の作者として知つてゐる司馬遷は大きな名前だが、當時の太史令司馬遷は眇たる一文筆の吏に過ぎない。頭腦の明晰なことは確かとしても其の頭腦に自信をもち過ぎた、人づき合ひの悪い男、議論に於て決して他人に負けない男、たかゞ強情我慢の變屈人としてしか知られてゐなかつた。彼が腐刑に遭つたからとて別に驚く者は無い。（傍線、孫）

この部分は素材がなく中島敦の創作である。すなわち、中島敦は、この司馬遷を「自信をもち過ぎ」、「人づき合ひの悪い」、「議論に於て決して他人に負けない」、「たかゞ強情我慢の變屈人」という（集団内における異物）として造型しようとし、まさに彼のこういう共同の規則に背いた性向により、「彼が腐刑に遭つたからとて別に驚く者は無い。」という結論を得ようとしたのである。ここからは、作者の司馬遷を「變屈人」に描こうとした意図と、またこういう性格に対して冷徹な眼を投じているのが明らかであろう。

司馬遷が登場しているのは「李陵」の第二章の全体と第三章の結末である。これの素材は、おおよそ『史記』や『漢書』や『文選』からとったと思われるが、しかし、素材の原文と対照してみれば、中島敦が素材を骨格にし自分なりに再創作したところが多いことが判る。特に、司馬遷の「反省」に関するものは、完全に中島敦の創作といつてよい。

『文選』（報任少卿書）は、受刑した後における司馬遷の内心の自然な流露と思われる。「李陵」における、司馬遷の悪運と悲境に落ちた憂鬱、憤懣や自決の不能などはこの素材からヒントを得たようであるが、それ以外は、さほど内なる関連性がないようである。とくに、彼の武帝に対する怨恨も感じられなければ「我在り」という自己反省も見られない。したがって、こういった部分は中島敦の感情移入したものであるといつてよい。

司馬遷は、悲運になった原因を追つていったあげく、「我在り」だけが悪かつたところと辿りついた。この結末の中味を別にすれば、この行為自身は中島敦の（自我もの）シリーズの進化したものといえる。しかし、司馬遷の「諦観」と進歩は虚像でしかない。それは、無理に自我を殺し「脱殻」になつたとしか思えないのである。彼の状況は、「名人伝」の木偶の如き紀昌とは境地が違つてゐる。つまり、司馬遷は、表では、外在の状況に抑圧されやむをえず「我あり」を無理に内に収斂させて「強情我慢」しているが、裏では、依然として「強情」な「我あり」の中を彷徨つてゐるのである。これは、いかにも中島敦的な「己の愚かさに殉ずる」人物であり、その悲劇性の本当の原因であるかもしれない。

こういった強情な男は、中島敦の新しく造型したものではない。司

馬遷と同じような「自我」の強い男には、斗南先生（「斗南先生」昭17・7）、李徴（「山月記」昭和17・2）、子路などもいる。斗南先生は、よく人を罵りわがままに暮らし一生何も得られず他界していった。李徴と子路のどれも「我在り」に殉じた。子路は、孔子に指摘されつつも死に至つても自分の悲劇性を悟らず「義」のために尽したと信じた。もし、子路の自我が「義」ならば、李徴のそれは「名」である。李徴は、自分の臆病な自尊心と尊大な羞恥心のために虎になつたと反省しつてもかつての人間であつた自分を嘲笑し、最後まで自分の「虎」性を持続し、つい完全に「虎」になつていく運命を背負わなければならなかつた。これらの主人公たちは自己反省の有無と関係なく、自分の「我在り」をいつまでも固く堅持しているのである。それゆえ、外在の世界と融合できないことから生じた矛盾の原因を認識できないことがそもそも問題の所在といえよう。

司馬遷の悲劇性は、封建社会において、本音と建前、自我と全体、臣と君の矛盾から生じたものである。すなわち、「他人に負けない」、「自信をもち過ぎた」彼が、「義」、「勇」、「忠」を抱え直言したが、しかし、この「義」、「勇」、「忠」とは、彼の「我在り」の過ぎた副産物ではないし、統治者としての武帝の立場、または封建社会の共同の倫理観からすれば、その「義」、「勇」、「忠」の仮面の背後にあるその弁は自我過剰であり、君主を犯したものである。臨場している重臣から「余りにも不遜」と斥けられるのはその所以である。この意味では、司馬遷の悲劇は「世界の悪意」というより、彼の性向或いは儒学文化とそれに基ついた制度に巧く同化できなかったことから生じたものといえよう。

二

司馬遷の失敗が、「我在り」がすぎたためだと言えるなら、李陵の悲劇は「我在り」と同質的な「私情」の祟りだと言える。俘虜になつて単于の帳房の中で目を覚ました李陵は、その第一の念からすでにジレンマに陥つてゐる——自ら首刎ねて辱めを逃れるか、それとも今一応は敵に従つておいてそのうちに機を見て脱走するか。ここでの李陵はもはや第一章の戦場に見られる果敢で決断たる性格を失ひ、いきなり「武」の剛性から「文」の柔軟へと變つてゐる。

この變貌は、外在なる条件の變化に伴つて次第に變つていくのであるが、この變貌を質的に促成させた必要な条件は、単于の善意なる軟待である。李陵は、正にこの善意という情に惹かれていったのである。

李陵の心理及び彼を取り巻いている諸要素はさまざまであるが、その變遷狀況を次のように整理してみる。

A、漢に対する気持——

- ① 単于の首を狙うが、容易には出来ない、成功だとしても、匈奴では己等の不名譽を葬るし、恐らく漢に聞えることはあるまい。
- ② 肉親が武帝に殺されたのを聞いて激怒、一族の貢獻に反した武帝への怨恨。
- ③ 母妻子を族滅された怨は骨髓に徹しているものの、漢軍と直接に戦う氣持がない。
- ④ 単于の言うように、漢の礼儀とは虚飾、漢人は利を好み人を嫉むこ

と、色に耽り財を食ふこと、漢初以来の骨肉相喰む内乱や功臣の排斥擠陥が甚だしいと思う。⑤ 今更死んでも格別漢のために義を立てることにならない。⑥ 李陵自身、匈奴への降服とは、自分の故國に尽した跡と、それに対して故國の己に報いた所とを考えるなら、「やむを得なかつた」こと。⑦ 漢に「歸るのは易い。だが、又辱しめを見るだけのことではないか？」と疑問、「大丈夫再び辱められるゝ能はず」と決心した。

B、匈奴に対する気持——

- ① 単于が男だと感心する。
- ② 左賢王が漢と戦うとき、左賢王の戦績をひそかに氣遣つていて、左賢王だけは負けさせたくない。
- ③ 「李陵は變つた」、自ずから漢に対する軍略の相談に乗り出し、単于の娘を妻とした。右校王を任じた。
- ④ 匈奴に化していいかどうかは、新単于への友情をもつても、自信がない。
- ⑤ 胡俗の粗野な正直さの方が、美名の影に隠れた漢人の陰險さより遙かに好ましい。
- ⑥ いつのまにか、この地に根を下ろしてしまつた多く恩愛と義理があるため、自殺もできない。

C、蘇武に対する気持——

- ① 蘇武は「稀に見る硬骨の士」
- ② 匈奴に降つて蘇武に会いたくない、遙か北方にいたので助かつたが、その面接を避ける。
- ③ 蘇武は何を目的に生きてゐるのか、何故再会、感動する。
- ④ 蘇武の名譽を求めず運命を笑殺する大我慢に驚く。
- ⑤ 蘇武は義人。
- ⑥ 精神の富者、ゆ

とりをもつて寛大なる態度。⑦蘇武の姿は、頭から去らずますます聳えてくる。⑧武帝の厚遇を受けたとはいえない蘇武は、武帝の崩じたのを耳にした時、南に向かつて号哭する、慟哭數日、竟に血を嘔くに至つた、その純粹な烈しい悲嘆には心を動かされずにいられない。⑨譬えようもなく清冽な、自然に現れて来る漢の国土への愛情。⑩蘇武の偉大さと答たれるものは変らないが、天は矢張り見ているのだ。

D、自己反省―

①単于の首を狙いながら、漢に迄聞えないであらうことを恐れて、ついに決行しなかつた。人に知られざることを憂へぬ蘇武を前にして、ひそかに冷汗の出る思いである。②自分は売国奴。③自分の弁明は蘇武の存在に無情に圧倒される。④精神の貧者、憐憫される。⑤「やむを得ない」は蘇武の存在に徹底的に否定されるのだ。⑥蘇武の存在は彼にとつて、崇高な訓戒でもあり、いらだたしい悪夢でもある。⑦武帝の崩じたことに対して自分には今一滴の涙も浮んでこない。⑧己と友とを隔てる根本的なものを発見し暗く自己懷疑する。⑨蘇武が偶然にも漢に帰れることとなる、李陵の心は動揺した。⑩天は矢張り見ているのだと、痛く打たれて肅然として懼れる。

E、漢の状況―

①我ままの武帝の専制政治、奸臣の李陵の売国行為を罵る。武帝の激怒により李陵家族の禍。②武帝が崩じた。③李陵と親しかった霍光と上官桀が太子の政を輔佐する。④大赦令が

下り万民は太平の仁政を楽しんでいる。⑤匈奴と親善講和する。⑥使節団が匈奴に派遣する。⑦李陵の故人が使節団に選ばれる。⑧霍光と上官桀が李陵を帰国するようと呼びかける。

「李陵」の第三章を書くのに使った素材は「報任少卿書」、「答蘇武書」、「李陵伝」、「蘇武伝」、「李將軍列伝」と思われる。全体的にいえば、「李陵」は基本的に典拠とした素材を忠実に記したうえで創作をしたものである。ここでは、本稿の考えを整理するためにその関係する二点だけを考察してみたい。

第一、典拠となる素材がなく中島敦の創作したものは、第三章における次の個所である。すなわち、捕らわれてからの李陵の心理、単于からの愛護や厚遇されること、軍事の示教を聞かれること、左賢王との友情、優遇された時の心理の変化、「やつぱり天は見ている」と嘆くところである。

第二、李陵と蘇武との再会について、典拠を使いながら新しく解釈した。「蘇武伝」では、二度にわたつて蘇武に降伏するよう説得するが、「李陵」ではとうとう口を開けなかつたと変えられている。

「李陵」の第三章は、李陵の心理を軸にその人物の悲劇性を浮き彫りにすることが主眼だと考えられる。ゆえに、この部分における典拠からの素材の取捨、活用に、作者の創作主旨が伺える。第一の、中島敦の創作と思われる部分と、第二の、典拠となる素材をその反対に使った部分を考察すればわかるように、それらは、あくまでも中島敦の李陵を浮き彫りにするための創作上の技巧であり、作者の心にある人物像をより一層明確化した工夫であることが判る。

「A、漢に対する気持」の部分を通覧すれば次のような結論が得られるであろう。①の李陵は、最初は漢に対する忠誠心をもって単于の首を狙つていながら躊躇つていた。その原因の一つは、匈奴における自分の不名誉、いま一つはおそらく漢に聞えることはあるまいと顧慮すること。これらは何かといえは「私心」である。②③武帝への怨恨は「不忠」である。④漢文化への否定は武帝への怨恨を前提にしたもので、そこにあるのはやはり「私心」、「不忠」といえよう。⑤漢に義を作ることへの否定、これも「不忠」の範囲に入る。⑥匈奴に降つたことへの強弁も、「私心」、「不忠」といわなければならない。⑦再び辱められるのを気にするので、祖国に背く。これも「私心」、「不忠」である。要するに、李陵の漢に対する気持は、多少の揺れがありつつも次第に漢から匈奴へと滑つていく、そして、その軸心は彼の「私心」、「不忠」である。

「B、匈奴に対する気持」の部分は、Aの部分と平行している。いわば、匈奴に化していかどうか時として自信がないにもかかわらず、全体としては、匈奴と単于に対する肯定、賛同、好感へと重心が移動していくのである。たとえば、単于に対する感心、左賢王に対する好意、また、自ずと漢との戦への参与を請願し、右校王になり、単于の娘を妻とし、匈奴文化の純朴と正直を認め、匈奴の地にすでに根を下ろした多くの恩愛と義理があるなどである。この部分の本質は、彼の「私情」と「義理」である。

論 「C、蘇武に対する気持」のポイントは、二人の間にある精神と境地の落差、また、蘇武の偉大さに鞭撻されること。蘇武の漢への純粹な「忠義」、「節操」に対し、李陵の漢に背いた「不忠」、「背信」であ

る。

「D、自己反省」の部分は、李陵の性格を多次元化させ、多重な人間像を浮き彫りにするものである。漢と匈奴との間、愛国と売国との間、帰国と亡命との間、現実と理想との間、現実と名誉との間、忠義と私情との間、自我と祖国との間におかれる李陵の内心の自由であり、彼の相克的な内心世界を示したところである。

「E、漢の状況」は、李陵の変貌していくのに不可欠の外在の条件であると同時に、また、彼の内心を測る尺度である。彼の置かれた状況は蘇武のそれに比べれば一目瞭然である。

こういった李陵は、史上の李陵とどう違っているのか。

次は、李陵の「答蘇武書」の關係内容を考察してみたい。この部分は先行研究では言及されていないようであるが、中島敦の李陵の性格を把握するには、一補助となるであろうと考えられる。この書は帰国した蘇武からの手紙に対する返信である。李陵はの中で、自分の漢に帰れない理由について、次のように記す。

漢厚誅陵以不死、薄賞子以守節、欲使遠聽之臣、望風馳命、此實難矣。所以每顧而不悔者也。陵雖孤恩、漢亦負德。昔人有言、雖忠不烈、視死如歸。陵誠能安、而王豈復能眷眷乎。男兒生以不成名、死則葬蠻夷中、誰復能屈身稽顙、還向北闕、使刀筆之吏、弄其文墨邪。願足下勿復望陵。

（漢王朝は、私が死ぬことのないのを厳しく責める一方、あなたの忠節に対して、薄い恩賞しか与えていない。こんなことで、遠く異国の地にいる私のような臣下に対して、天子の徳を慕い、そ

の命令に奔走することを期待するのは、到底不可能なことである。幾たびも顧みて、熟慮を重ねてみても、私に悔いる気持ちが起らないのは、かかる理由によるのである。古人曰く、「忠誠においてはめざましくなくとも、死などまったく畏れはしない」と。

私は死に対して心安らかなる者であるが、しかしさて、天子はそれに応えるほどに、陵のことを思いやつてくださるお心がおありであろうか。男子たる者が、生きては名を成すことが出来ず、死んでは蛮夷の中に葬られることになったとしても、一体、誰が身を屈め、額を地に打ち付け、帰還して宮廷に赴き、そして書記役の小役人が私を弾劾する文書を書かせることに堪えられるであろうか。であるから、これ以上どうか私には何の期待もお持ちにならぬようにお願い申したい。(『文選』〔答蘇武書〕)

この断片から分かるように、李陵は、漢に対してすでに断念し、そのことを逡巡する気持はすこしもない。その代わりに冷静さまたは冷酷さを感じられるのである。がしかし、この書を読んだはずであろう中島敦は必ずしもそれだけにしないで、前記のA、B、C、D、Eが示しているように、李陵を立体化し、漢と匈奴の両極の間に彷徨っている多元化した李陵に造型することによって、その悲劇性を描こうとしたのである。

以上に整理したことから分かるように李陵の彷徨は、大状況と小状況とによって構成された混沌たる多次元の世界における自己定立にかかわるジレンマである。具体的に、奸臣の言を信じ、また、この私の死を望んでいる君主である武帝と如何に対処すべきか。漢に迫害され、

見捨てられた李陵は匈奴の厚遇を蒙っているが、その好意をいかに漢のそれと位置づけをするか。家族を滅した武帝への怨恨を抱えて、尊敬され厚遇される単于に投じるか、それともすでに多くの私情と義理ができた単于一族からの純粹の愛を見殺しにし、見捨てられた漢に帰るか。自分の私情を棄て大義をもって蘇武のように漢を愛するか、それとも礼儀、忠義云々という呪縛から逃げ出し、気持の動くまま匈奴の地で余生を送っていくか。これらは、いずれどちらを選んでもすべてが巧くは行かないようである。変った漢の現状からすれば、漢に帰る条件がすでに備わっていた。すなわち、問題の中心人物の武帝がすでに崩じ、漢では仁政が行われている、それに自分の故人が朝廷の牛耳を取っている。事件の真相を説明すれば、万事終るはずである。がしかし、李陵は最後にやはり匈奴に留まることを選んだ。再び辱められることを思う(「私心」)は、彼の漢に帰る道を遮断しているのである。しかし、ここでは、李陵の彷徨っている行為や揺れ動く感情の多くは、ただ一人の個人としてのものだけでなく、社会の多くの要素に制約されているのを見逃してはならない。それらは、(「私情」)、(「義理」)、(「忠義」)、(「節操」)などに抽象することができるが、その背後にある儒学思想が根本的な原因だと言えよう。

### 三

司馬遷、李陵、蘇武の運命にかかわっているのは、武帝の政治の制度である。しかし、武帝の政治制度を維持するのは、その時代の共通の倫理観であった。要を先に示せば、漢の武帝の政治に大きく影響し

ていたのは董仲舒の（天人合一）の思想であるが、これこそ「李陵」のキャラクターたちをひそやかに制約する最後の要素となるのである。

春秋以来、百家諸子の思想はさまざまな角度から社会に影響を与えた。以後、秦以来の頻繁なる戦争、経済の衰え、思想の多次元の中において、支配者にとってその統制を巧く維持するためにその時代に相応しい学説が必要となってくる。武帝は詔を出し天下の賢人から治国の良策を募集していた。そこで、儒学者の董仲舒（前180〜前115）はその詔<sup>10</sup>に応じて治国の策を献上した。『漢書』「董仲舒伝」によると、

「仲舒在家、朝廷如有大議、使使者及廷尉張湯就其家而問之、其皆對有明法。」（董仲舒は家に居りながら朝廷は大事があるときに使いおよび廷尉張湯を遣つて問ひに来るが、その都度にみな上策を持ち出した。）というほど漢の武帝の政治に強く影響力をもつていた儒学者である。董仲舒は武帝に「罷黜百家、獨尊儒術」（百家を禁じ儒学を尊ぶのみ）という策を献上した。武帝は、よりいっそう中央集権政治を強化するために、果敢にこれまでの「黄老の学<sup>11</sup>」を元にした政治制度を変え、董仲舒の献策を採用した。前記の『漢書』によると、漢の武帝は董仲舒が献策して以来、孔子の思想を推し進め、百家の思想を抑し禁ずる（及仲舒對冊、推明孔氏、抑黜百家）ようになったという。

このことから、武帝はどれほど董仲舒の政治対策を重んじたま実施<sup>12</sup>していたかはわかるであろう。

董仲舒の学説の基礎は天である。天は万物の元であり、万物はみな天から出たものである。この天は意識のあるものであり、また、天と人との間には対応関係が存在するという。董仲舒は、「道之大原出于天、天不變、道亦不變」（道の如何なる大きいものでもみな天から出

たものゆえ、天が変らなければ道も変らない。）（『漢書』「董仲舒伝」）と言ひ、また、「天子受命于天、天下受命于天子。」（天子は天から命を授けられ、また天下は天子から命を授けられる）（『漢書』「董仲舒伝」）という論説を出した。これは、政治からすれば、帝王は天意の代言人となり、天下の民はみな天意を代表する帝王の絶対統制に従わなければならないとなるのである。董仲舒のこの思想統一を目的とした献策は、統治者にとって望ましいものに違いない。

董仲舒は、儒学思想を中心に「奉天法古」（天を奉り古に法る）とし、先王の道を手本とし陰陽五行説を吸収し、「推天道以明人事」（天の道を推して人事を察する）とした天人合一の神学体系を創つた。それで、彼は「天人感應」、「奉天法古」の原理に基づいて統治の学説とともに「三綱五常」（三綱とは君臣・父子・夫妻の道、五常とは仁、義、礼、智、信）という社会の倫理体系も創立した。むろん、この思想も武帝に大いに受け入れられた。彼の「殺身成仁」、「安貧樂道」という主張は人心を制約し、武帝の政治を行うための一助になった。封建時代の倫理道德としての三綱五常は、親子夫妻の家庭関係を根拠に、封建制度を基礎に、忠君、忠孝を軸に、家族の政治化と国家の家族化を図つた、その核心は「忠」と「孝」とを絶対化し、統治者の封建君主政治を強化することにある<sup>13</sup>。

以上の眺望を通して、漢の武帝の時代における哲学思想、社会倫理道德の実質を把握することができるであろう。すなわち、武帝の時代において、天意の代表者としての君主の神化された絶対地位、それに三綱五常を基礎とした君臣関係が強化され、また共通の道德理念とした「殺身成仁」、「安貧樂道」、「忠」、「孝」、「仁」、「義」、「礼」、「智」、

「信」などは社会の上部構造の基盤となつていたのである。

こういつた時代背景において、天意の代表者としての、絶対権力と尊厳を有する武帝の立場からすれば、李陵と司馬遷のような問題の性質は明らかである。君臣の道を害したと思われる彼等の行為に対し、一國の君として武帝はこの國の尊嚴や君主の名譽などを守らなければならぬ。それゆえ、李陵の族殺、司馬遷の宮刑はその時代に還元してみれば治國の法や道に合つた正当的な罰であり、それも仁政のまたひとつの形態である。

司馬遷は、李陵のために弁じた時、李陵のことを「孝」、「信」、「誠」、「勇」、「忠」と褒めた。これは、彼の個人の立場からすれば事実かも知れないが、しかし、すでに武帝から否定された（嚇怒）李陵をほめたことこそ、君主としての武帝の（天意）に違反することになつてしまふのである。おまけに、その弁の背後に潜んでいる「自信をもち過ぎた」「自矜」などは、臣として（不忠）としか思われぬ。ゆえに、彼の挙動は「王道の三綱」に立つている群臣から一致して「余りにも不遜」と叱責されたのである。司馬遷自身は「何といつても武帝は大君主」で、自分の悪かつたのは「我あり」がすぎたという程度まで反省ができたが、しかし、この反省は、依然として個人の立場の中に徘徊し当時の臣として厳しく守るべき「王道の三綱」、「殺身成仁」、「忠」に従わなかつたのである。司馬遷の悲哀は、悪意の世や「我あり」がすぎたというより、学者としての彼は武帝の政治における董仲舒の「天人合一」の思想の真髓を心得ず、またそれに順応することができなかつたためであるといつてよい。

君臣の道において、極限状況におかれた李陵は、「殺身成仁」とい

う運命を強いられた。これは、彼の敗戦に対する武帝の平静な態度と、彼の降伏したことを聞いた武帝の嚇怒から反証される。如何なる理由があつても事実として敵國の匈奴に降つた、この一事は、彼のこれまでの「孝」、「信」、「誠」、「勇」、「忠」をことごとく抹殺してしまつた。

武帝の期待した「王道の三綱」に従つて、漢への「忠義」をもつて「殺身成仁」をなすことに反した、この行為は当時からすれば（天意）を冒したと思われる。しかも、彼はその後、ますます武帝の期待に反してマイナスの方向へ走つていった。むろん、彼は時どき内心では漢への未練がないでもないが、しかし武帝に対する怨恨は始終消えなかつた。彼の、単一の一族に対する好感、義理は、（私情）に由来し、武帝に対する怨恨も（私情）から出たものである。彼のこれらの行為は、すべて個人の立場に立つて、（私情）の如何によつて物事を判断し、（私情）を（忠義）の上に持ち上げて、自分の安否得失を無限に拡大したのである。そして、これらは、漢の「君臣の道」の否定を前提として可能となつたのである。李陵は「ああ我も天地間の一微粒子のみ」と、自分の微小と悲運を嘆じた。しかし、彼は全の宇宙における「一微粒子」としての彼があるべき場所とその作用を悟らず、その宇宙の規則を拒否し周りとの連帯関係を自ずと断ち切り、心身の両面ともあるべき軌跡から離れ、流れ星のように宇宙を彷徨つていくのである。李陵は「天は見てゐたのだ」と悲嘆し、「肅然として懼れた」と感じたのは、おそらくこういつた苦しみ心が無意識のうちに漏れていたものであろう。

「李陵」の主題は一般に「存在根拠の喪失」、「人間の生の条件」、「運

命の悪意」とされる。これらの論は、いずれも「李陵」の表層に現れる文学作品としての人物の生存とその運命に留まっている。しかし、前にも触れたように、「李陵」にかかわっている問題はただ人と運命との相克、個人と社会との関係という単一の構造ではなく、その中に沈澱している文化思想が大いに小説の主人公たちの運命に影響しているのは無視できない。すなわち、李陵や司馬遷や蘇武などの幸福と悲劇を成したのは、表層にある人間関係や武帝の暴政というよりその時代の「君臣の道」というソフト的な要素である。また、その表層に見えないソフト的な要素の核心は董仲舒の（天人合一）の思想である。極端に言えば、これこそ舞台の芝居人形を操っている最後の要因なのである。

漢の武帝の時代に作られていた上部構造としての倫理道德の全般は、「天人合一」「君臣の道」「忠義」「殺身成仁」「孝」などに代表されるが、それらの全てはまた（公德）という一つの概念で概括することができるとは、したがって、李陵と司馬遷の悲運は、こういった（公德）と（私情）との矛盾によって齎されたものだと言つてよいであろう。

この意味で言うなら、自我を持ちすぎたため時代の主流文化や価値観にうまく融合できず、苦しみと悲運に陥つたのは、李陵と司馬遷に限らず、斗南先生をはじめ、「己もの」の主人公たち、李徴、悟浄、子路などなのいずれもその連鎖の一環である。

司馬遷は自分の悲運になつた原因を、武帝をはじめ、奸臣、好人物という客観から自分自身の主観まで探し回っていたが、しかし、とうとう求められなかった。李陵は漢と匈奴の間に挟まれそれらに左右されながら苦悩しているが、その本当の原因は悟らなかつた。李陵や司馬遷だけでなく、蘇武、武帝、または群臣のいずれも時代の文化思想

によつて制約されていて、誰もその呪縛から逃れることができなかつた。これは、「李陵」の深層に潜んでいる人間の悲運といえようか。

注 (1) 深田久彌「中島敦の作品」(『中島敦研究』昭和五十三年十二月、筑摩書房)。

(2) 福永武彦「中島敦、その世界の見取図」(昭和三十四年十二月、『近代文学鑑賞講座』18中島敦、梶井基次郎、角川書店)。

(3) 福永武彦「李陵」(昭和三十七年十二月二十二日『信濃毎日新聞』、昭和四十六年六月新潮社刊『枕頭の書』所収)。

(4) 鷺只雄「李陵」の構造」(『中島敦論』「狼疾」の方法』所収、平成二年五月、有精堂)。

(5) 木村一信「中島敦(李陵)の世界」(昭和四十六年四月、『日本文藝研究』第二十三巻一・二号)。

(6) 岡岡彬一「漢書から見た『李陵』」(昭和三十五年六月、『中島敦全集月報』シタラ三三、文治堂書店)。

(7) 平田貫一郎「中島敦の『李陵』」(昭和三十五年九月、『立正大学国語国文』二)。

(8) 佐々木充「『李陵』と『弟子』」——中島敦：中国古典取材作品研究(一)——(昭和三十六年十月、『帯広大谷短期大学紀要』創刊号)。

(9) 竹田晃編「文選」(文章篇・中) (『新釈漢文大系』83)、平成十年七月、明治書院)。

(10) 元光元年(前134)五月に、武帝は賢良の者に「招賢良」という詔を出した。いま、『漢書』(武帝紀)に全文が載っている。この詔により、学者、董仲舒、公孫弘らが出たという。

(11) 黄老之学とは、戦国時代に興じた哲学政治思想流派のことである。黄は黄帝、老は老子を指す。

(12) 劉蕙孫著『中国文化史述』(1997年12月、文化艺术出版社)。

(13) 顧建華編『中国伝統文化』(1998年8月、中南工業大学出版社)。(そんじゅりん、大連外国語大学助教授)